

IHCSA 主催「定例講演会」開催

平成 28 年 6 月 28 日（火）、当協会は国際相互理解促進事業の一環として「定例講演会」を六本木の国際文化会館で開催し、80 名あまりの方々にご参加いただきました。

今回は、認知科学、デジタル・サイエンス、イノベーション政策論、組織論、エネルギー・環境政策などを専門とし、日本産学フォーラム事務局長を務められた経験を持つ 武田アンド・アソシエイツ代表 武田修三郎氏をお招きして、『平成の訳語（おさ）Age of Digital Disruption』というテーマで、デジタル時代の創造的破壊による大変革期が導く New World について語り、その本質とそこで求められる通訳のプロとしてのマインド力について講演いただきました。

まず初めに、参加者の多くが通訳あるいはガイドを職業とする方であることから、日本の外交の裏にはいつも「訳語」（おさ＝通訳）がいた、と遣隋使で小野妹子に随行した鞍作福利（くらつくりのふくり）から、明治維新のジョン万次郎や福沢諭吉を例に出して、日本の革新期に「訳語（通訳）」が果たした役割が大きかった、と話されました。

次に現代日本固有の問題として、世界の高等教育における学生数の大幅な伸びに対して、日本の学生数は増えていないこと。また大学進学率では米国に追いつかないだけでなく、韓国にも追い抜かれてしまったこと。若者はリスクを避けて定年まで安定した仕事を目指し、研究者は学术论文を書かなくなっているなど、日本の国際競争力が劇的に低下していると指摘されました。人口増加による「人口ボーナス」（経済等の成長）が既に終わりを告げ、2050 年には平均年齢 52.3 歳となり、GDP は世界の 1.9%（1990 年には 15%）という予測を例に挙げ、このままでは「日いずる国」ではなく「日しずむ国」になると警鐘を鳴らされました。

その一方で世界ではデジタルなデータが指数関数的に増大していて、過去 3 年のデータ量はその前の 4 万年分よりも多いと指摘し、1 つのテクノロジーが様々なものに発展するテクノロジーの「幹」として、21 世紀はデジタルテクノロジーが「幹テクノロジー」となると解説されました。現代の科学では人間を含む自然の大本は、アナログ的連続性の世界ではなく、デジタル的離散値（とびとび）の世界であると説かれ、デジタル的思考の重要性を強調されました。

またその様な世界であるからこそ、教育は「厳しいが、失敗を恐れず、創造力が習得でき、才能よりも気概（ガッツ）を大切にする」ものであるべきで、より高い目的とより深い思考へ導くものでなければならない、と述べられました。

最後に参加者に対し「（通訳など）多文化を経験することは、その人の創造性を増加させる」と励まし、「自己評価ができる（自分に厳しく）」、「飛躍ができる（本物を知る）」、「世界主義的見解が持てる（より深い思考）」、「デジタル思考ができる」ことを目指して欲しいとお話を結ばれた。



【武田修三郎氏プロフィール】

学歴：1966年に慶応義塾大学大学院卒業後、米オハイオ州立大学で理学部博士号を取得。

職歴：1975年より2005年3月まで東海大学工学部教授。その間、東京大学生産技術研究所研究員、コーネル大学客員教授（平和研究所）、ジョージワシントン大学国際関係学部客員教授、テネシー州立大学学長特別補佐（副学長）および特別教授（コンピュータ・サイエンス）、リーハイ大学アイアコッカ研究所エグゼクティブ・フェロー、米外交評議会中東フォーラム（エネルギー・セキュリティーグループ）カウンセラー、クエスト大学（カナダ初の私立大学）設立委員会メンバー等。また、政府審議会（総合エネルギー調査会等のメンバー）を歴任。1992年日本産学フォーラム創立に参画、2009年まで事務局長。2006年から2012年まで早稲田大学総長室参与および大学院教授。

現職：武田アンド・アソシエイツ代表、理化学研究所経営顧問、文部科学省参与、京都大学大学院特任教授（思修館）、米オーリン工科大学学長会議メンバー、米ワシントン大学（セントルイス）アジア評議員メンバー、ほか。

著書：『崩壊するエネルギー文明：再点検（リビジット）』（2011年11月）、『フロニーモスたち（心を研ぐ）』（2009年1月）等多数。